

クニポビッチ海嶺の地磁気3成分異常

Preliminary results of vector magnetic anomalies along and across the Knipovich Ridge

野木 義史[1], 沖野 郷子[2], 浅田 美穂[3], 玉木 賢策[2]

Yoshifumi Nogi[1], Kyoko Okino[2], Miho Asada[3], Kensaku Tamaki[4]

[1] 極地研, [2] 東大・海洋研, [3] 東大・海洋研・テクトニクス

[1] NIPR, [2] ORI, [3] O.R.I., University of Tokyo, [4] ORI, Univ of Tokyo

超低速拡大の海嶺であるクニポビッチ海嶺のテクトニクスを明らかにすることを目的として、2000年8月30日から9月23日にかけて、ロシアの観測船ロガチェフにより、クニポビッチ海嶺の調査航海が行われた。本航海に船上地磁気3成分測定装置を設置し、クニポビッチ海嶺沿いおよび海嶺を横切る測線で、地磁気3成分異常の観測を行った。本講演では、クニポビッチ海嶺沿いおよび海嶺を横切る測線で得られた、地磁気3成分異常の初期段階の結果について報告する。

クニポビッチ海嶺は、アイスランドの北、スバルバルの南近くの北極海嶺のひとつである。この海嶺の特徴としては、予想される拡大方向に対して海嶺軸方向が大きく斜行しており、海嶺近傍の構造物も様々な走向を持っている。海嶺軸の走向も、北緯76度15分付近で変化し、南で北北西、北でほぼ南北の走向となっている。超低速拡大軸であること、などがあげられる。また、これまでの熱流量観測の結果からは、拡大速度が東西で非対称であるといわれている。しかし、これまでに北極域での地磁気全磁力異常の結果がまとめられ、公開されているが、その結果からは、クニポビッチ海嶺付近で、明瞭な地磁気異常縞模様は見られず、地磁気異常からは拡大速度の非対称性は不明である。

超低速拡大の海嶺であるクニポビッチ海嶺のテクトニクスを明らかにすることを目的として、2000年8月30日から9月23日にかけて、ロシアの観測船ロガチェフにより、クニポビッチ海嶺の調査航海が行われた。本航海に船上地磁気3成分測定装置を設置し、クニポビッチ海嶺沿いおよび海嶺を横切る測線で、地磁気3成分異常の観測を行った。本講演では、クニポビッチ海嶺沿いおよび海嶺を横切る測線で得られた、地磁気3成分異常の初期段階の結果について報告する。